



未来につながる「発見」は、現場のなかにこそ存在する  
地に足をつけ、志を高くもって、未来を切り開ける人材であれ

## アジアで、日本の地方都市で燃焼する 現地発・現場発、未来を切り開く試み

私は、人間には「開拓型」と「活用型」の2つの生き方があると思っています。前者は、先例のないところで自ら「新しいものを切り開く」生き方、後者は弁護士や会計士のように「整備されたものを活用する」生き方です。もちろん、良い悪いの問題ではありません。ただ、私が、私のゼミで学ぶ学生たちに願っているのは、志を高くもって切り開く側に立ち、自らの生を熱く燃やす人生をおくってほしいということです。

高度成長を成し遂げ、現在の閉塞感に悩む日本からは見えにくいことですが、いまアジアには燃焼するエネルギーがあふれています。その最先端にあたる中国では、10代～30代前半の若い人びとが自国や社会に深い関心



を寄せ、自分たちの手で希望を紡ぎだそうとしています。アジアを起点とするグローバリゼーションが、いままさに起ころうとしているのです。そして、日本でも地域や地方に目を転じれば、同様の試みがそここで始まっています。上からお仕着せの「地方活性化」ではない、現場発・現地発の、未来を切り開く試みです。例えば、島根県北部の斐川町は、2万2000人にまで減少した人口がいま、往時を上回る2万7000人にまで回復しました。20年間で28社の企業誘致に成功し、若い世代が活躍できる町を実現し、「企業誘致の手本」とまで言われています。斐川町をはじめ岩手県の花巻市や北上市、長野県の岡谷市など、いま元気な地方都市に共通しているのは、自分たちの発想とプランで活性化を実現したこと、そして1人ないし2人の若者が、その活動の中心を担ったことです。とっくに成熟期を迎えたといわれる日本でもまだまだチャンスはある、たった1人の力で5万人前後規模の市町村を変えることが可能だということです。

## 欧米に学びとる時代は終わり。 これからは10年かけて 新しい枠組みを創造する時代

未来を切り開くためには、変革への契機となる「発見」が必要です。その発見とは、書物のなかには存在しません。現場と現実のなかにしか存在しないからこそ、現地へ足を運び、汗を流し、地べたを這い回ってはじめて発見できるのです。そのために私のゼミでは毎年、学生たちによる徹底した現地調査を行い、提言まで含んだ調査レポートを作成しています。参加する学生は、国内なら1人1万字以上のレポート作成が義務であり、海外なら現地集合・現地解散で、調査先の企業も自力で訪ねます。そして訪問先のトップと会話し、インタビューを行います。この訪問に先立ち、私は学生には「名刺をもらってこい」と告げ、企業トップに対しては「インタビューの合格点として名刺を渡してほしい、できるだけ渡さないようにしてほしい」と依頼しました。結果は、厳しい条件であったにもかかわらず、多くの学生が名刺を持ち帰ってきたのです。

形だけの現地研修が多いなかで、一橋大学のこうしたやり方は、厳しいかもしれません。でも、だからこそやる意味があるのだと思っています。自分たちで学びとった知識と徹底した議論から生まれるレポートは、コンサルタント会社よりレベルが上と評価されているものもあります。また、こうした研修には、院と学部の学生だけでなく、企業の第一線で働くOBやOGも参加しています。「もう一度原点を見直したい」「固まりかけたアタマをリフレッシュさせたい」等々、参加の動機はさまざまですが、全員が何かを学びとり、仕事や生き方に活かしているように思います。

研修を通して、生き方を発見した学生も少なくありません。ある学生は、1年間休学して香港企業に就職、アジアの最前線で日々営業に走り回っています。またある学生は、斐川町の活性化の実態を体験し、自分の故郷で町の再生にかける決心をしました。さらに、ある女子学生は、将来地方都市で工場経営を継ぐ前に「10年間、世界を経験し、経営に活かしたい」と、海外に飛び出していきました。グローバリゼーションは時代の必然でしょうが、だからこそ世界の現実を現地でしっかりと見つめること、そして自分の国を内側からキッチリ見つめること、その両方が大切なのです。

日本はこれまで100年かけて欧米諸国から学びとり、日本という国を作り上げてきました。でも、もう模倣でよしとする時代ではありません。自国の未来のあるべき姿を自分たち自身で考え、10年かけて自分たちの手で新しい枠組みを創造していくべき時期を迎えていると思います。そこで頑張れる人、新しい希望をつくり上げていくことのできる人材が一橋大学から次々と育てて行ってほしいと、私は心から願っています。(談)